

# 地方禅宗史の研究

—越後・妻有地方を中心として—

竹内道雄

はじめに 地方禅宗史とは

臨済宗より改宗の主要寺院

(一) 京都・鎌倉をはなれた地方の禅宗史

(二) 中世創立寺院の時代および派系

(二) 大本山をはなれた地方の禅宗史

(三) 妻有の禅宗（曹洞宗）概観

(三) 研究動向

一 越後・妻有地方とは

(四) 妻有の歴史・文化の性格

(一) 越後と妻有

(二) 妻有の仏教寺院数一覧

(二) その地域—資料の地図によつて説明

寺院概勢

(一) 各派系の地域・世紀一覧

(一) 上・中・下越、佐渡

(二) 妻有地方II十日町市・中魚沼郡

二 越後禅宗史の概勢

について

(一) 神宮寺伝広目天王背板裏面墨書銘

(二) 曹源寺（妙雲院）妙昭譲状

(一) 禅宗と他宗の比較

(二) 曹洞宗の概勢

(三) 林泉寺古曹証状

(四) 長徳寺由緒書

おわりに 妻有神宮寺の本尊三仏像について（スライド映写）

はじめに

本日は、標記の題目にもとづいて、最近まで行つてきた研究成果の一端を発表したいと思う。

(一)はじめに「地方禪宗史」の概念について述べておきた

が、法嗣の明峰素哲・峨山韶碩によつてその基盤は固められ、特に總持寺二祖峨山韶碩およびその法嗣のいわゆる峨山の五哲—二十五哲によつて、教団は淵叢の地越前・能登・加賀を離れ全国各地方にわたる驚異的大発展をとげた。

以上の意味から、日本の禪宗史の主流は中央のそれよりはむしろ地方禪宗史にあるといつても決して過言ではない。ここに「地方禪宗史の研究」の最大の意義がある。

(二)さてついで最近の研究動向などを一瞥すると、各派禪宗

史そのものの教団・教理・思想等の歴史だけではなく、他宗の教団・教理・儀礼等との関り合い、在俗の外護者、領主・国人等との関係、民衆への宗教政策と信仰との係りなど多彩に、また総合的、立体的に研究がすすめられている。

一 越後・妻有<sup>つま</sup>地方とは

さて以上のような地方禪宗史研究の意義をふまえて、副題

(一)日本の禪宗の場合、臨濟宗は京都・鎌倉の五山を中心には南北朝・室町各時代に亘り長く中央の歴史を彩つてきただが、応仁・文明の大乱（一四六七—七七）以後、戦国時代に入ると眞実の禪僧は地方に下り、いわゆる林下の禪寺が成立した。やがてその一部は教団を形成し地方に大発展をとげた。特に妙心寺教団は殆ど全國に地方発展をとげ、南禅寺・東福寺・建長寺・円覚寺各派教団がこれについている。



にあるような「越後・妻有地方を中心にして」その研究成果の一端を披露したいと思う。

〔）まず「越後・妻有」というのは、「越後と妻有」、即ち「新潟県と十日町市・中魚沼郡」の意味であり、本論の主旨は越後の禪宗史の概勢を述べ、それを背景にして「妻有の禪宗史」の概観を述べてみようというものである。

〔）次にその地域について三頁の資料の地図によつて説明したいと思う。(イ)新潟県は普通、上・中・下越、佐渡の四地区に分けられる。京都に近い方から上・中・下の順序で名づけられている。上越地区は、上越・新井・糸魚川各市、中・東

・西各頸城郡の三市三郡、中越地区は、長岡・栃尾・柏崎・

小千谷・十日町各市、三島、南蒲原、刈羽、古志、北・中・

南魚沼各郡の五市七郡、下越地区は、村上・新発田・豊栄・

新潟・新津・白根・五泉・燕・三条・加茂・見附各市、岩

船、北・東・中・西蒲原各郡の一市五郡からそれぞれ成っている。以下各地区の町村は地図に見る如くである。各地区のうち下越が県政の中心地である。新潟県は豪雪地で知られているが、下越は降雪量は比較的少なく、中越・上越の山間部が豪雪地帯である。県全体文化の後進性は否めず、佐渡地区は金山と流人の島で知られ、京都の文化が移入し、特色あ

る文化性が存する。

〔）さて次に妻有地方とは中越地区に属し、現在の十日町市・中魚沼郡の地域を指す。新潟県の中南端に位置し、長野県の最北端と接しており、世界一の豪雪地帯とされている。妻有の語源は「つまる、ゆきづまる」ことを意味する「詰まり」というのがこれまで通説とされてきたが、最近、京都から中仙道を経て関東・東北地方に行く途中の宿場の地、すなわち「泊」（とまり）から出ているのではないかという説が出ている。しかし文字通り恋妻の有るロマンの故郷を誇称する郷土人も多い。

## 二 越後禪宗史の概勢

さて次に越後禪宗史の概勢について述べよう。

〔）まず禪宗と真宗・時宗の寺院数を比較すると「表〔〕」のようになる。ここで天台・真言・日蓮・淨土等の各宗を除いたのは、いずれも妻有の宗教史と関係が薄いからであり、時宗を入れたのは、鎌倉新仏教中、最初に妻有地方に伝播したのは時宗であり、現在十日町市内には新潟県内最大の時宗寺院来迎寺があるからである。さて表によると、越後においては真宗寺院が断然多く一一九六か寺に及び、禪宗寺院は八九

五か寺である。しかし真宗教団は東本願寺派、西本願寺派等とそれぞれ独立しており、禅宗のうち曹洞宗は大本山永平寺・總持寺のもとに一宗としてまとまつた教団であるので、

曹洞宗が最大の教団となる。だが曹洞宗の寺院数八八三か寺は、真宗東本願寺派の寺院数八五二か寺に比べて三一か寺多いにすぎない。時宗寺院は二二か寺にすぎないが、上・中・下越、佐渡と越後全地区に及んでいるのが注目される。

〔表(一)〕 禅宗と淨土真宗・時宗の比較

宗名	宗 派 等		寺院数
禅宗	曹 洞 宗		883
	臨 済 宗	円 覚 寺 派 9 妙 心 寺 派 3	12
	計		895
淨 土 真 宗	本願寺（西本願寺）派		272
	大谷（東本願寺）派		852
	高田		12
	光 照 光		44
	淨 北		1
	本 願 寺		14
	計		1,196
時 宗	上 中 下 佐		越 越 越 渡
			8 7 3 4
	計		22

(S. 58. 12. 8 発行『新潟県寺院名鑑』による)

なお現在新潟県の曹洞宗寺院数八八三か寺は、愛知県の一三三三か寺、静岡県の一二〇一か寺について全国第三位である。

(二)次に「中世創立寺院を中心にして」臨済宗、曹洞宗の歴史発展の概況を述べてみよう。

(1)越後の禅宗史は臨済宗の扶植に始まる。それはまず十三世紀中葉、無関普門（聖一派・東福寺派）による真言系密教寺院華報寺（下越）の改宗であり、ついで蘭渓道隆（大覚派・建長寺派）による真言宗寺院正応寺（中越）・東山寺（中越）の改宗である。だがこれらの寺院はいずれも十五・六世紀に曹洞宗に転宗した。ついで十四世紀の前葉、無関の法孫平田慈均によつて大輪寺（下越）が開創されたが十六世紀の初め曹洞宗に改宗された。「表(二)ノ(1)」は以上の寺院の概況をまとめたものである。次に室町時代に入ると仏光派（円覚寺派）が隆盛となり、応永十七年（一四一〇）覚翁祖伝によつて関興庵（後の関興寺、中越）が開創され、戦国時代には長尾・上杉家の外護を得て、越中・能登・信濃にまで末寺を持つ總本寺となつたとされるが、十六世紀の戦乱と上杉景勝の会津転封で衰えた。越後の

地方禪宗史の研究（竹内）

〔表(二)ノ(1)〕 臨濟宗より改宗の主要寺院

寺院名	開創年代	開山	寺派	現在所	改宗年代	備考
華報寺	一二三五～五一	無閑普門	東福寺	北蒲原・笛神	一四七七	元真言宗
正應寺	一二四六	蘭溪道隆	建長寺	三島・出雲崎	一五〇四以前	元天台宗
輪山寺	一二四七	同右	同右	南蒲原・栄	一五三四	元真言宗
大東寺	一三四六	平田慈均	東福寺	北蒲原・中条	一五〇九	

現在の臨濟宗寺院は表(1)に見るよう二二か寺にすぎない。

(口) 次に曹洞宗の扶植はまず文和二年(一三五三)源翁心昭による慈眼寺(下越・弥彦村)の建立である。ついで応安六年(一三七三)無着妙融による光徳寺(所在不明)、至徳三年(一三八六)大徹宗令による悦翁寺(上越市)、明徳元年(一三九〇)無等良雄による正統寺(下越・黒川村)の開創・開基である。だがこれらの源翁・無外・大徹・無底派の法灯は続かず、後世、太源・通幻派に中興された。また注目すべきは、応安三年(一三七〇)妻有地方の神宮寺(十日町市)が僧契教によつて禅寺に改宗されたことである(当寺は江戸時代曹洞宗に中興)。以上南北朝時代曹洞宗の概勢であるが、その他を含めての派系別表を示せば「表(a)」のようである。

次に室町時代に入ると曹洞宗寺院の開創数は俄に増加して

八八か寺となり、年間開創数は前代の約五倍となる。この時代には、太源派傑堂能勝による応永元年(一三九四)耕雲寺(村上市)、永享元年(一四二一九)雲洞庵(中越・塩沢町)、応永十年(一四〇三)慈光寺(下越・村松町)、南英謙宗による文安三年(一四五六)種月寺のいわゆる「越後四箇の道場」がそれぞれ開創され、太源派傑堂系発展の基をきずいた。太源派の如仲天闇(天闇)は東海に進出し、その門流は大發展をとげるが、越後の如仲系は下越・中越の山間部に僅か法灯を維持した。

ついで通幻派は各派系多彩に伝播した。まず普濟系(普濟善救始祖)の越前宝円寺四世高巖理柏によつて応永十五年(一四〇八)長福寺(中越・川西町)が開創され、通幻派最初の法幢が樹立し、ついで応永年間、龍傳慧金によつて香積寺(柏

〔表(二)ノ(口)一越後・佐渡国曹洞宗中世開創・改宗寺院概勢一覧〕

〔表(a)〕

○南北朝時代(1336~91) —56年間—

〈地区別数〉

地 区	下 越	中 越	上 越	佐 渡	不 明	計
寺 院 数	4	0	1	3	2	10
年 改 間 宗 開 概 創 數	0.07	0	0.02	0.05	0.04	0.2

4捨5入以下同

〈現在の派系別数〉

派 系	無 底	太 源		通 幻		源 翁	不 明	計
		太初	傑堂	了庵	普濟			
寺 院 数	1	1	2	1	2	1	2	10
			3		3			

崎市）が改宗され奥羽にまたがる大本寺を形成した。次に了庵系（了庵慧明始祖）の活動著しく、まず下野瑞光寺法山謙正によつて文安元年（一四四四）林泉庵（中越・小出町）が開創された。ついで上野龍華院天巽慶順の文安四年（一四五七）安樂寺（後の龍穩院、長岡市）の開創、法孫公器憲章による寛正四年（一四六三）曹源寺（栃尾市）の開創によつてこの天巽系は中越地区に伸展した。一方、天巽の法弟陸奥長禄寺月窓明潭は応仁二年（一四六八）觀音寺（下越・安田町）を建立し、下越通幻派—了庵系の一大拠点となした。これよりさき上野雙林寺三世曇英慧應は中越に入り、長禄元年（一四五七）広大寺（十日町市）を開創し次代発展の一起点となした。ついで下野大中寺快庵妙慶は応仁元年（一四六七）顯聖寺（上越・浦川原村）の開山に請じられ、上越地区曹洞宗の中心寺院となした。次に通幻派天真系（天真自性始祖）の活動も注目され、丹波円通寺五世雷庵性隆は長禄二年（一四五八）天台の古刹を改宗して転輪寺（上越・吉川町）となし、天真系の最初の拠点とし、その門流は下越・中越方面へ発展した。ついで常陸金龍寺四世然芝等忻は文明六年（一四七四）興隆寺（後の興泉寺、五泉市）を開創し、下越天真系の中心寺院となした。以上の室町時代曹洞宗の概勢を表にす

〔表(b)〕

○室町時代(1392~1490) —99年間—

〈地区別数〉

地 区	下 越	中 越	上 越	佐 渡	不 明	計
寺 院 数	37	30	12	8	1	88
年 改 間 宗 開 概 創 数	0.4	0.3	0.1	0.08	0.01	0.9

〈現在の派系別数〉

派 系	無 底	太 源			通 幻				源翁	大徹	実峰	不明	計
		太初	傑堂	如仲	了庵	石屋	普濟	天真					
		1	41	3	19	3	4	10					
寺院数	1	45			36				1	3	1	1	88

れば「表(b)」のようになる。

次に戦国、安土・桃山時代に入ると曹洞宗は教団として隆々たる発展をとげた。戦国時代に開創・改宗された寺院数は一六〇か寺であり、年間比率で前代の二倍余となり、安土・桃山時代は一一四か寺が開創・改宗され、これも前代の二倍余であり、加速の度が加えられている。ついでこの両時代の寺院数を見ると、下越・中越・上越・佐渡の順に数が多いが、戦国、安土・桃山時代は上越地区に多くなつており、通幻派了庵・天真系の勢力が増大している傾向にあることに気付く。だがこの時代は末寺五か寺以上を持つ小本寺の建立が減少している。この時代の各派系の活動、発展の状況については、ここでは省略するが、最も注目すべきは通幻派了庵系の上野雙林寺派の太源派・傑堂系を凌ぐ活動である。雙林寺三世曇英慧応は明応二年(一四九三)吉蔵寺(小千谷市)を開創、ついで明応五年(一四九六)長尾能景開基・建立の林泉寺(上越市)の二世となり、師一州正伊を勧請開山となした。そのうち林泉寺は上杉謙信の帰依および長尾・上杉家の菩提寺・祈願所となつて隆々たる発展をとげ、楞嚴寺(柿崎町)以下直末一二か寺、門葉一九か寺を持つ小本寺となり、中・上越通幻派寺院を支配する僧録的地位を占めるに至つ

〔表(c)〕

○戦国時代(1491~1572) —82年間—

〈地区別数〉

地 区	下 越	中 越	上 越	佐 渡	計
寺 院 数	80	49	22	9	160
年 間 開 創 概 数	1.0	0.6	0.3	0.1	2.0

〈現在の派系別数〉

派 系	明 峰	無 底	源 翁	太 源			通 幻				計
				太初	傑堂	如仲	了庵	石屋	普濟	天真	
寺院数	1	1	1	0	87	1	47	4	5	13	160

〔表(d)〕

○安土・桃山時代(1573~98) —26年間—

〈地区別数〉

地 区	下 越	中 越	上 越	佐 渡	計
寺 院 数	56	28	22	8	114
年 間 開 創 概 数	2.2	1.1	0.8	0.3	4.4

〈現在の派系別数〉

派 系	太 源			通 幻				不 明	計
	太初	傑堂	如仲	了庵	石屋	普濟	天真		
	0	58	2	31	1	5	16		
寺院数	60			53				1	114

た。そのほか雙林寺派には曇英勸請開山の定正院（長岡市）があり、雙林寺直末寺院として觀泉院（十日町市）、宝泉寺（同上）がある。その後、曇英の門流は中・下越地方に広く伝播した。以上の戦国、安土・桃山時代の概勢はそれぞれ「表(c)」、「表(d)」に表示した。

さて以上、中世越後禪宗史の概勢について述べたが、これを要するに中世越後の禪宗は鎌倉時代に臨済禪の扶植によって成立し、南北朝・室町時代に曹洞禪の進出によつて教団が形成された。その展開の経緯は臨済宗が奈良・平安の旧仏教を改宗して発展し、室町末期から戦国時代にかけては、臨済宗に転宗した旧仏教の主要寺院が更に曹洞宗に転宗した。こうして曹洞宗が禪宗教団の主流となり、中世領主層の武士の帰依と外護、および民衆の信仰、支持を得て、旧寺院を改宗、新寺院を多く開創し、真宗教団等に拮抗して隆々たる發展をとげたのである。

〔注〕この項、拙稿「中世越後の禪宗教団の展開について」（『宗学研究第二十九号』、昭和六十二年三月三十一日発行）、「禪宗教団の展開」（『新潟県史通史編二中世』、昭和六十二年三月三十日発行、所収）参照。一部重複している箇所のあることをお断りしておきたい。なお「表

(a)・(b)・(c)・(d)は、上掲の『宗学研究』所収のものを転載した。

### 三 妻有の禪宗（曹洞宗）概観

次に本研究発表会の主題ともいべき、妻有地方の禪宗（曹洞宗）について研究成果の概略を述べてみたいと思う。

〔一〕その前に妻有の歴史・文化について瞥見しておきたい。

妻有の歴史は一口に比喩をもつて言えば雪に埋れた忍従、悲運の歴史であり、概して時の支配者、権力者に頼使され、駆使されてきた歴史であった。しかしこうした歴史の中で、日本歴史に不朽の名をとどめているのは、建武中興・南北朝時代に活躍した大井田経隆・氏経を中心とした大井田氏一族（新田氏の庶子家）とこれに従った妻有郷の先祖であった。かれらは鎌倉幕府打倒の先陣となり、その後、建武中興・南北朝時代を通じ一貫して南朝の天皇を正統の君主と仰ぎ、ついにその節に殉じた。代々妻有の人びとはこの歴史を郷土の誇りとして現在に語り伝えている。この大井田氏の築城にかかる大井田十八城の中世山城の遺跡は、天下の名城として知られる楠木正成築城の河内の千早城に匹敵するものとされている。

ところでこれまで妻有地方は、越後・信濃両国にはさまれた狭隘の地で文化果つる所と一面さげすまられてきた。しかし現在、妻有地方の文化関係の大事業として歴史の編さんを行われつゝあり、すでに津南・川西両町の町史の編さんが終り、中里村史も完成に近付き、十日町市史の編さんも着々と

〔表三ノ二〕妻有の仏教寺院数一覧表

十日町市・中魚沼郡仏教寺院数一覧				
宗派	区分	十日町市	中魚沼郡	合計
曹洞宗	13	17	30	
真宗大谷派	1	2	3	
真宗高田派		3	3	
時宗	2			2
天台宗	3	3	6	
修驗宗	3	5	8	
日本山妙法寺大僧伽		1	1	
合計	22	31	53	

(『新潟県寺院名鑑』による)

計画通り進捗し成就されようとしている。この間に妻有の過去の貴重な文化が続々と発掘されて、その歴史と文化は新しく書き替えられつつある。津南町、中里村の原始旧石時代の遺跡・遺物、川西町の中世の梵字・板碑群、十日町市の日本最大の火焰土器等は、日本及び世界の文化に伍して遜色なき雪国が生んだ先人の文化遺産である。また最近は妻有神宮寺の本尊が神仏習合信仰の本地仏の典型として県の文化財の指定を受け、妻有の文化の目玉ともいうべき織物について「越後縮の紡織用具及び関連資料」が国の重要有形民俗文化財の指定を受けるに至っている。さらに市史編さんの最新の資料の発見により、十日町市がかつて京都を凌ぐ織物の産地であったことが明らかにされたようである。また曹洞宗に関係した一例をあげるならば、『曹洞教会修証義』を編さん完成了永平寺六三世瀧谷琢宗禪師はこの妻有地方の中魚沼郡川西町の出身である。

(二)さて次に如上の妻有の歴史・文化を背景にして、妻有の仏教の趨勢を見ると〔表三ノ二〕のようである。これによると妻有地方は、曹洞宗寺院の数が圧倒的に多く三〇か寺を数え、全体の五六、六パーセントを占めており、曹洞禪、曹洞宗教団の王国の觀がする。これについて修驗宗八、天台宗

## 曹洞宗寺院一覧

(S. 63.1 現在)

地方禪宗史の研究（竹内）

現在の派系	本寺	末寺数		現在所	備考
		延享	現在		
通幻・普濟	越前宝円寺	7	8	川西町千手 中里村倉俣	開創1説1428 郡市外末寺4
"	川西長福寺			十日町市下条	
通幻・了庵	上野双林寺			津南町上郷	
太源・如仲	信濃常慶院			十日町市土市	元天台宗
通幻・了庵	上野双林寺	1	1	津南町中深見	
太源・如仲	信濃常慶院	2	2	川西町霜条	
通幻・普濟	川西長福寺			川西町上野	郡市外末寺3
太源・傑堂	信濃龍雲寺	5	5	川西町友重	元真言・天台宗
通幻・普濟	川西長福寺			十日町市小泉	
通幻・了庵	上野双林寺			津南町中深見	
"	東頸城顯聖寺	1	1	十日町市鎧坂	
太源・傑堂	川西長安寺			十日町市高島	
通幻・了庵	南魚雲洞庵			十日町市四日町	
"	柏崎安住寺	2	2	津南町外丸	
"	信濃禪透院			中里村田沢	
"	長岡定正院			十日町市昭和町	
"	上野竜沢寺	3	3	津南町芦ヶ崎	
"	津南竜源寺			中里村貝野	
"	十日町智泉寺			津南町大井平	
"	東頸城觀音寺			十日町市中条	
太源・傑堂	十日町智泉寺			川西町室島	
通幻・了庵	川西長安寺			十日町市西寺町	元天台宗
"	十日町智泉寺			十日町市中条	1370禪宗改め
太源・如仲	四日町真淨院			津南町赤沢	
"	津南大竜院			津南町外丸	
通幻・了庵	四日町真淨院			十日町市四日町	
"	玉島円通寺			十日町市六箇山谷	
明峰・珠巖	土市觀泉院			十日町市大黒沢	
通幻・了庵	川西長福寺			川西町水口沢	尼僧法団

(『中魚沼郡誌』による)

六、真宗大谷派・真宗高田派各三、時宗二の寺院数となつてゐる。ただこれはそのままその宗派の勢力の順位にはならない。この中で修驗宗・天台宗は信徒のみで定まつた檀信徒数は持つていらない。檀信徒数の多寡から宗勢の順序をいふと曹洞宗、時宗、淨土真宗、天台宗、修驗宗ということになる。

(三)さて「表三ノ(三)」は、妻有地方曹洞宗寺院一覧表

〔表三ノ(三)(イ)〕 越後妻有地方(十日町市・中魚沼郡)

No.	開創年代		山号	寺院名	開山		開基
	日本	西暦					
1	応永 15	1408	竜雲山	長福寺	宝円 4	高巖理柏	中興城主下平吉良
2	嘉吉元	1441	双玉山	東光寺	長福 3	笑顔舜葩	
3	長禄元	1457	鶴嶺山	広大寺	双林 3	曇英慧応	
4	長享 2	1488	八幡山	吉祥寺	常慶 7	智巖天察	野本成氏
5	弘治 2	1556	吉祥山	觀泉院	双林 9	奪州香与	
6	永禄 4	1561	船秀山	大龍院	常慶 9	巖翁天鷺	
7	永禄 11	1568	赤城山	清竜寺	長福 6	伝室存盛	星名九右エ門
8	亀元元	1570	積雲山	長安寺	竜雲 2	鳳菴存龍	城主上野長安
9	天正 7	1579	白雲山	長徳寺	長福 6	伝室存盛	
10	天正 8	1580	水沢山	宝泉寺	双林 13	大通関鉄	領主上杉景勝
11	天正 10	1582	深見山	竜源寺	顯聖 10	日山建慧	
12	天正 11	1583	玉重山	東光寺	長安 2	日州泉策	領主上杉景勝
13	天正 13	1586	竜沢山	長樂寺	雲洞 15	不改宗達	城主長尾義景
14	天正 19	1591	天福山	真淨院	安住 4	明山義光	
15	文禄 4	1595	青松山	善玖院	禪透 5	丹室正鷺	福原氏
16	慶長 8	1603	広河山	泉竜寺	定正 10	巖翁広林	
17	慶長 12	1607	滝沢山	智泉寺	竜沢 6	介州伝良	
18	慶長 14	1609	大沢山	竜昌寺	竜源 2	付天伝与	
19	慶長 16	1611	福聚山	慈眼寺	智泉 2	雲高玄瑞	倉俣主膳正
20	元和元	1615	大平山	善福寺	觀音 5	南州惠薰	
21	元和年間	1615~23	桂沢山	円通寺	智泉 2	雲高玄瑞	
22	"	"	松林山	相国寺	長安 6	量室存応	
23	明暦元	1655	智海山	水月寺	智泉 3	葉岩大益	
24	明暦 3	1657	竜王山	長泉寺	真淨 4	波岩寿清	
25	寛文 10	1670	竜華山	実相庵	大竜 5	理岸本州	要右エ門
26	延宝元	1673	凍氷山	久昌寺	大竜 3	笑外春哲	高橋・村山・江村氏
27	延宝 8	1680	臨泉山	神宮寺	真淨 6	朴巖道淳	
28	宝永~寛保	1704~43	聖寿山	祇園寺	円通開	徳翁良高	
29	明和 6	1769	大沢山	慈雲寺	觀泉 14	寢州祖海	
30	享保年間	1716~35		地蔵院	長福 15	法屋弘孫	

〔竹内調査・研究,『新潟県神社寺院明細帳』,『新潟県寺院名鑑』,

で、開創年代、山号名、開山、開基、現在の派系、本寺、末寺数、現在所の項目に区分して示しましたものであり、全て曹洞宗として開創、改宗された年次を基準としたものである。「表三ノ(三)(イ)」は現在の派系の地域・世紀別の表である。これらの一表を見ると、妻有の曹洞宗寺院および曹洞禅の特色、傾向が次のように最もよく現われていると思

〔表三ノ三(口)〕

各派系の地域・世紀別表

地域 \ 派系	太源・傑堂	太源・如仲	通幻・普濟	通幻・了庵	明峰・珠巖	計
十日町市	2	0	0	10	1	13
川西町	2	0	4	0	0	6
津南町	0	4	0	4	0	8
中里村	0	0	1	2	0	3
計	4	4	5	16	1	30
寺院開創世紀						
15C.	0	1	2	1	0	4
16C.	3	1	2	5	0	11
17C.	1	2	0	9	0	12
18C.	0	0	1	1	1	3
計	4	4	5	16	1	30

われる。

まず(1)の表を中心に検討するとつぎのような特色が窺われる。(1)通幻派の越後における最初の扶植は前述したことではあるが、応永十五年(一四〇八)越前宝円寺四世高巌理柏による長福寺の開創で、その地はこの妻有の川西町(現在)であること。(2)越後における数少ない明峰派の徳翁良高開山の寺院が一か寺あること(祇園寺)。(3)元天台宗で応安三年(一三七〇)いち早く禅宗となつた寺院があること(神宮寺)。(4)開基の明らかな寺院は全体の半分以下だが、城主・領主層が多いこと。一か寺以上の末寺を持つ小本寺は二か寺であり、いずれも川西町に所在していること。(5)小本寺中、越後内に本寺を持つ寺院は僅か二か寺で、ほかの五か寺は越前・上野・信濃に及んでいること。

次に表(口)を中心考察するとつぎのような傾向にあることが分る。(1)通幻派—了庵系が圧倒的に多く全体の半分以上、一六か寺を占めていること。(2)太源派は八か寺でこれにつぎ、中でも越後で数少ない如仲系が山間地帯に四か寺集中してであること。(3)寺院数は十日町市が一三か寺で最も多く、津南町八・川西町六・中里村三か寺と続いていること。(4)ついで寺

院の開創世紀表を見ると、十六・七世紀に開創された寺院が殆どで二三か寺にのぼっていること、⑤妻有地方では、通幻派—普濟・了庵系、太源派—如仲系が一五世紀にいち早く扶植したことが知られる。

以上がこれまでの研究成果にもとづく妻有の曹洞宗の概観である。

#### 四 妻有地方禅宗史の研究中に発見された禅宗関係資料 四点について



神宮寺所蔵 伝広目天王背板裏面墨書銘

さて次にこれまで妻有地方禅宗史の研究中に発見され、また問題とされるに至った資料のうち四点をえらんで紹介し、簡単に説明を加えてみたい。

(一)の資料は、本論でも述べた妻有神宮寺（十日町市）の本尊木造十一面千手觀音立像が新潟県文化財の指定を受けたのを契機に、木造四天王立像二軀（伝広目天王・伝毘沙門天王）と共に昭和四十七年六月十七日～十月二十日の間に、奈良市辻本干也仏師の工房で解体復元修理が行われたとき、辻本仏師によって発見された伝広目天王の体内修理銘文である。

右為風雨朽後二度造<sup>(マ、)</sup>榮時也

奉造立此二天王前及五百歲 応安三年庚卯月十八日  
越後国波多岐<sup>(十日町市)</sup>大井郷内天福山神宮禪寺住持僧契教  
勸進諸大旦那合力仏師兵部公□□

広明

〔神宮寺資料〕

(イ) 銘文の内容の主旨は次のようである。

この広目・毘沙門二天王を修理したのは、観音堂が風雨のため朽ちたのち二度目の造営をした時である。この二天王をはじめて造立し奉ったのは、応安三年（一二七〇）四月十八日より五百年も前のことである（即ち八七〇年—貞觀十二年—造立）。この修理は、越後国波多岐庄大井郷内の天福山神宮禪寺住持僧契教の発願のもと、勧進諸大旦那と仏師兵部公某及び、広明が力を合わせて行つたものである。

(ロ) 次にこの銘文によつて始めて明らかになつた歴史事実は次の如くである。

① 応安三年（一二七〇）という北朝年号が使用されていることによつて、当時、神宮寺は北朝の庇護のもとに堂宇の一度目の造営がなされ、その時二天王像の修理（本尊も同時と思われる）が行われたこと。その二天王の始めての造立は当時より五〇〇年前の貞觀十二年（八七〇）であったこと。

② 現在の臨泉山神宮寺は、当時、天福山神宮禪寺と称し、この時すでに「禪寺」であつたこと。因みに天福の山号は、道元禪師が興聖寺を開創した時の日本年号（一一三三）と

同じであり、現在は神宮寺の本寺真淨院の山号となつている。神宮寺の山号は現存の山門・観音堂が建立された宝暦十一年（一七六一）～天明二年（一七八二）以後、天福山から臨泉山に変つたようである。

③ 当時の神宮禪寺の住持は契教と言い、仏像修理の仏師某と広明は「兵部公」という称号を持つてゐるから官衙の仏師（京都あるいは奈良で官厅・役所に仕える仏師）ではなかつたかということ。

④ 神宮寺の禪宗改宗年次応安三年（一二七〇）は越後の大本寺耕雲寺（村上市、太源派—傑堂系）開創応永元年（一三九四）に先立つ二四年前であり、その時、神宮寺が禪宗の臨濟宗か曹洞宗かは不明だが、住持契教の名前からして京都近辺の曹洞宗宏智派ではないかと思われる。

⑤ 現在の神宮寺所在地は当時「波多岐大井郷」と呼ばれていたこと。このことは「妻有と波多岐」の地域範囲に問題を投げかけ、また現在神宮寺所在地十日町市四日町を中心の大井田氏（既述した南朝の遺臣）の名を取つて大井田地区と呼んでることを裏書きしてゐる。ただそれが大井郷であつて大井田郷でないのは、北朝によつて「田」の字が削除されたのではないかと思われる。

## 六 曹源寺妙昭讓狀

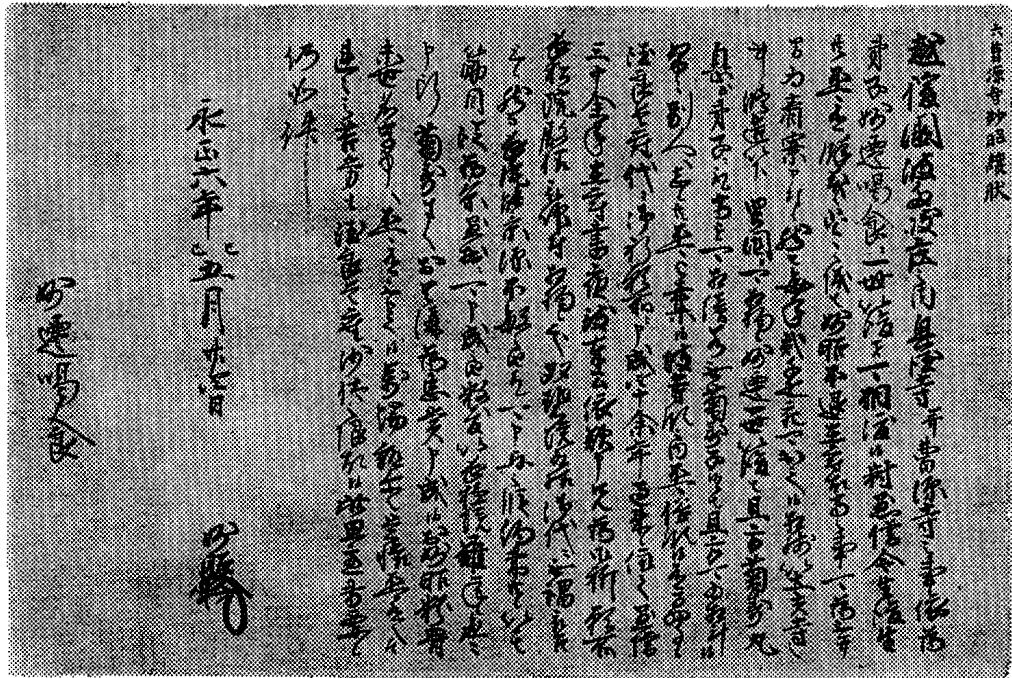
越後國波多岐庄之内興徳寺并曹源寺之事、依為弟子、妙遷  
喝食 = 一世以後者可相渡候、對愚僧今生後生 / 共不可有余義  
候、只今之儀者、妙昭不退在府故、寺之事可為不 / 弁間、為  
看寮申付候、然者每年式千疋宛可出之候、相殘以土貢寺之 /  
事修造以下堅固 = 可相拘候、妙遷一世以後者、旦方菊寿丸  
息 / 弟子 = 取、寺を可相続、若無菊寿子候者、旦方可為相  
計候、 / 努々別人へ志候共不可与奪候、 / 彼寺領之内不可俗  
領候、有子細事候、 / 德良首座代 = 御祈願所 = 申成、四十余  
年過來候、依之愚僧 / 三十余年在府、書夜致奉公、依歎申、  
先為御祈願所 / 上杉房定<sup>(1)</sup>長松院殿様被仰付、相拘候処、双碧院殿様御  
代 = 、無謂被召上候、然而長尾能景深不敏之由候て、可申与  
之段約束共候、以其筋目、從為景愚拙 = 可申成之由、數度  
以長授院雖承候、色々申断、菊寿方へ、於天溝為忠賞申成  
候、於妙昭粉骨、 / 末世名字中へ不可有不足候、万端聊爾之  
覺悟不可有之候、 / 連々之苦勞も、德良首座沙汰之限故候、  
此思慮專要候、 / 仍如件、

永正六年己五月廿四日

妙昭（花押）

妙遷喝食

上野文書 曹源寺妙昭讓狀



〔注〕（1）越後守護。明応三年十月十七日卒。

（2）越後守護代。永正三年九月十二日（一説に二十六日）卒。

（3）東頸城郡松之山町天水。長尾為景は守護上杉房能の養子定  
実を擁して房能を攻め、永正四年八月七日、房能は天水に  
おいて自殺した（「越史」三一四八八頁）。

（「上野文書」—「北越中世文書」参照）

右(2)の資料は現在の川西町の戦国時代に節黒城の城主であ  
った上野長安以下の上野氏に関する「上野文書」の中の一資  
料で、永正六年（一五〇九）曹源寺（妙雲院）住持妙昭が弟  
子妙遷に与えた寺院・寺領の譲状である。

(1) 資料の内容の主旨は次の如くである。

那の上野氏に一任せよと命じたのである。そのあと彼は両  
寺の寺領を決して俗人（主家・領主）の所領にしてはなら  
ないことを厳重に注意したのである。その理由として、自  
己の師匠時代からの四十余年の歴史を回顧し、苦心惨憺し  
て上杉氏の祈願所にして寺院を保護してもらい維持してき  
たが、主家・領家が代ると逆にその祈願所という理由で寺  
領まで没収されるおそれがあるからだとして、具体的な歴  
史事実をあげて指摘したのである。

(2) 次にこの資料によつて、十六世紀、戦国時代の禪僧が守  
護・領主に仕えて政治面で活躍し、併せて自坊の寺院・寺  
領の管理・維持にいかに苦心していたかを知ることができ  
ると共に、同時代の支配者と寺院側との寺領をめぐる利害  
関係の厳しさが窺われる所以である。

(3) 林泉寺古曹証状

この資料は本論においても既に言及した越後に於ける通幻  
派最初の扶植寺院長福寺の文書である。即ち天正十六年（一  
五八八）三月二十日、春日山林泉寺（上越市、八頁前出）十  
一世渓堂古曹（一六〇五）が、長福寺五世鳳山林鷺（一五九〇）に江湖会開催の許可を与えた書状である。  
(1)ついでこの文書の要訳は次のようである。



長福寺所蔵 林泉寺古曹証狀

追而、徵所分明之間、一筆如斯、  
普濟門派之証文分明、此之上之事者、江湖之御興行可然候、  
天正十六年

三月廿日

林泉寺

古曹（花押）

長福寺

衣鉢下

〔長福寺文書〕

書状での願いがあつて、その後いろいろ調査したところはつきりしたので一筆左のように返事をする。長福寺が正しく普濟門派であることの証文がはつきりしたから、この上は、申請した通りの江湖会の修行の開催は然るべく行つてよろしい。

(口) 次にこの文書によつて左のことが明らかにされる。

- ①この年に長福寺において結制安居、授戒会等の曹洞禪の修行、布教の会が大々的に行われ、近隣の曹洞宗の僧侶、檀信徒が多数参集して修行に励んだことが推定される。
- ②林泉寺が代々長尾・上杉家の菩提寺・祈願所であったため、僧録的地位を占め、大きな権威をもつて配下の曹洞宗寺院に臨んでいたこと。

#### (四) 長徳寺由緒書

この資料は長徳寺の由緒書<sup>がき</sup>で、「慶長子」の年に長徳寺中興開山伝室存盛（一六一一）が中世以来の歴代住職を書き上げ、最後に当寺の本末関係を示して奉行所に提出したものである。「慶長子」の年は慶長五年（一六〇〇）と慶長十七年（一六一二）が考えられるが、曹洞宗の最初の寺院諸法度の発布が後者であるから慶長十七年であろう。

長徳寺は前述の長福寺の末寺であり、元天台・真言の密教

寺院。〔の資料に見える妻有神宮寺と似た縁起を持ち、千手観音の別当寺で、古来神宮寺の姉妹寺院とされてきた。曹洞宗改宗は天正七年（一五七九）である。

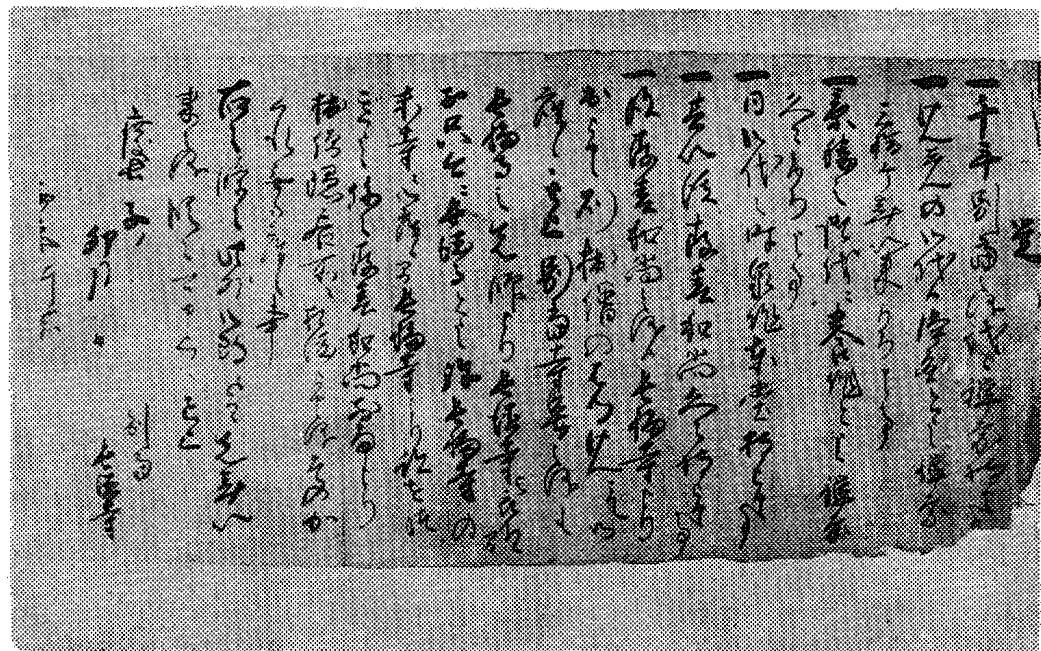
(1) 次にこの資料を要訳すると次の如くである。

- ①千手観音の別当は代々禪宗寺院が受持つことになつてゐること。

②上杉謙信の時代は淨円という禪僧が三〇年間も住持したこと。

③上杉景勝の時代には養作という禪僧が長く住持をし、ついで同時代に家作東堂（長福寺の東堂か）が住持をし、それ以後は存春和尚が長らく住持をしてきたこと。

④存春和尚は長福寺の僧で、私（伝室存盛、當時長福寺六世）が長徳寺に遣わしたのである。別当寺号のことも長福寺の先師（長福寺五世鳳山林鷺〔一八頁前出〕）の時から長徳寺と申してきた。まことに長徳寺は長福寺の末寺であるから、本寺の長福寺から跡つぎ（後住）が出ることになつてゐる。現在は存春和尚別当から長徳寺を私の隠居所にということで渡されて住持となつてゐる次第でこれは間違いないことである。



長徳寺所蔵 長徳寺由緒書

覚

一、千手別當之儀代々禪宗持之事

一、けんしんの御代ハ淨円と申禪宗、三拾ヶ年以來も申候事

事

一、景勝之御代ニ養作と申候禪宗、久々もち申候事

一、同御代之時家作東堂持被申候事

一、其以後存春和尚久々持被申候事

一、後存春和尚之儀ハ長福寺より出被申候、則拙僧のはつげんにて御座候、其上別當寺号之義も長福寺之先師より長徳寺と被申候間、至只今ニ長徳寺と申候、誠長福寺の末寺ニ御座候間長福寺より跡をつぎ申候、弥々存春和尚別當より拙僧隱居所ニ相渡被申候様そのかくれ無御座候事  
右之条々此外御尋ニ候ハ、先年以来之儀段々可申上候、已上

慶長子ノ

卯月 日

御奉行所

別當

長 德 寺

(「長徳寺資料」)

(口)右の「長徳寺由緒書」によつて、當時、長徳寺が千手觀音の別當寺であり、千手觀音の別當は代々禪宗寺院が担当していたことが知られる。別當寺を持つ千手觀音は現在と同様、當時においても地域住民の信仰の中心であり、從つて中央の幕府、寺社奉行には古刹として政治的にも注目されていたことが分る。なお長徳寺の歴住は、当初本寺の長福寺を退位した住職が長徳寺を隠居所としてその住持職に就くことになつてゐたようで、長徳寺一世には長福寺八世迦山存林（一六五一）が就位している。だがこのたてまえもその後崩れ、長徳寺の歴住で長福寺の世代住職であつた僧は僅か三人に過ぎない。因みに前述の神宮寺も十一面千手觀音の別當寺であるが、本寺の真淨院の隠居所として真淨院六世朴巖道淳（一六四〇～一七二〇）が入寺して中興開山となつており、長徳寺・神宮寺両寺の性格の類似はまことに興味深いものがある。

### おわりに—妻有神宮寺のスライド映写—

妻有神宮寺は、本論で述べたように、妻有地方禪宗史の草分けの禅寺である。本尊三仏像は昭和四十七年解体復元修理が行われ、その際、応安三年（一三七〇）の伝広目天王背板

裏面墨書銘文が発見され、またこの時すでに禅寺であつたことが分り、一躍越後・妻有宗教史の注目的的となつた。本尊木造十一面千手觀音立像は本来秘仏であつたが、この際その全貌が公開され、細部にわたつて写真・スライドの撮影が行われた。

今回は右の妻有神宮寺の四季の境内、豪雪に埋れた山門・觀音堂を始めとする諸伽藍をも含め、本尊三仏像の全容・広目天王背板裏面墨書銘文等のスライドを映写して公開した。

〔付記〕本稿は、昭和六十三年一月十三日、本学院会館において口頭で発表したものに若干の修訂を加え、文語の文章としてまとめたものである。なお研究発表報告をまとめに当たり、既に発表した拙論、また約十年間たずさわって編さんされた『新潟県史通史編二中世』（昭和六十二年三月発行）、『川西町史』「資料・通史編」全四巻（同上年月完成）所収の筆者分担の論述を参考、または引用したこと

を付言して読者のご寛恕を乞いたい。

（昭和六十三年十二月十四日稿了）